

1) がん検診とその意義

令和3年度厚生労働科学研究

精神障害のある方に対するがん検診及びがん診療のアクセシビリティを向上するための実装研究

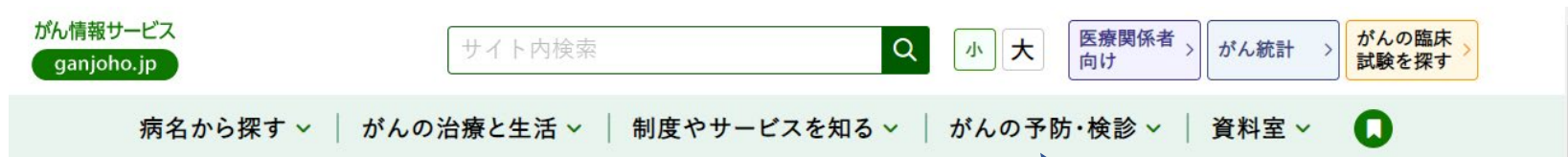
分担研究：かかりつけ精神科の臨床場面における精神障害者に対するがん検診勧奨法の

実施可能性の検討-多施設介入研究

2021年12月25日 ver1.0

がん検診について

- 現在、わが国のがんによる死亡者数は年間37万人を超え、死亡原因の第1位です。
- 診断と治療の進歩により、一部のがんでは早期発見、早期治療が可能となりつつあります。
- がん検診には、利益と不利益がありますが、正しい方法を正しく行うことにより、がんによる死亡を減少させることができます。



確かながんの情報をお届けします

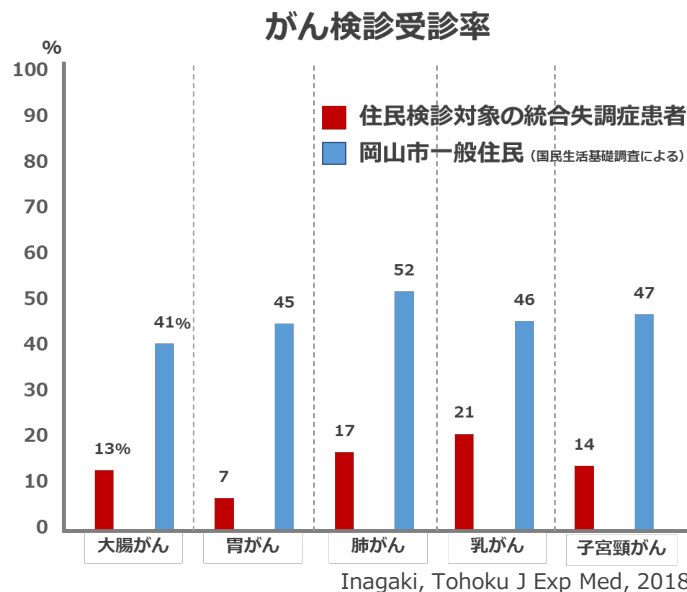
当サイトは、国立がん研究センターが運営する公式サイトです。

ぜひこちらのサイトで
知識を深めて下さい



精神障害者とがん

- 精神障害を抱える人は、精神障害のない人と比較して、進行したがんで発見されることが多いことがわかっています。
- 精神症状などの影響で、進行がんに必要な侵襲的な治療（手術、化学療法、放射線療法）が受けられない方もいます。
- がん検診で早期発見できれば、根治する機会がより望めます。
- しかし、がん検診受診率が低いことが問題です。



例えば、統合失調症患者さんでは一般住民の半分以下の受診率です。

患者さんの健康増進のため、かかりつけの精神科医療者だからこそできるサポートがあります。

健診と検診の違い

■健診

健康状態を確認し、病気を予防することを目的とする。異常の場合は、発病を防ぐための指導を受けることになる。

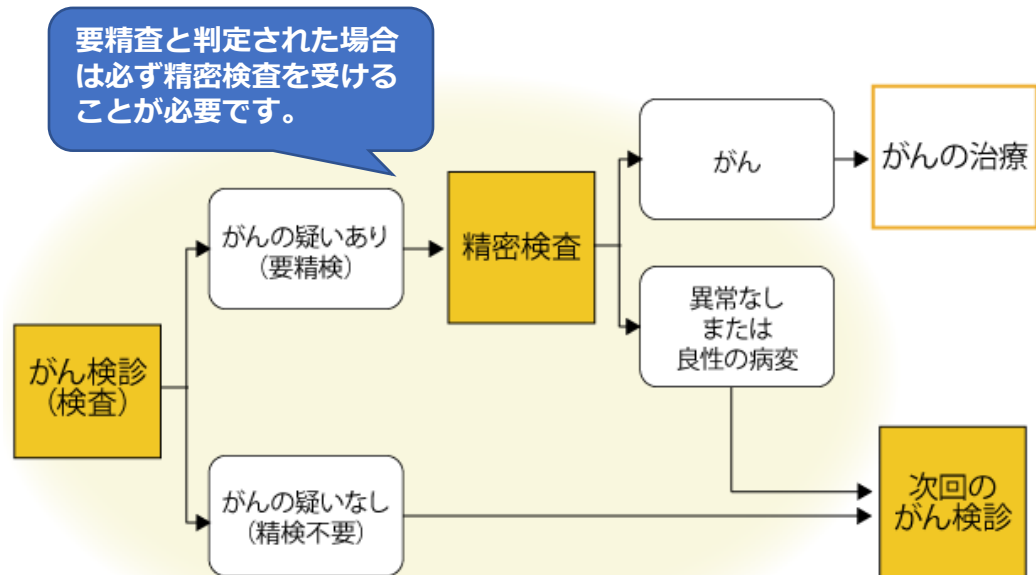
- 特定健康診査（特定健診）：メタボリックシンドロームに該当するかどうか判定するため、血圧、血液検査、生活習慣の問診、腹囲測定などを受ける。
- 一般健康診断：労働安全衛生法に基づいて職場が実施する。

■検診

特定の病気を発見するために行うスクリーニング検査。代表的なのが「がん検診」。要精検の場合は、確実に診断することが必要。

がん検診の流れ

- がん検診では、健康な人に対して、「がんの疑いあり（要精検）」か「がんの疑いなし（精検不要）」かを調べ、「要精検」の場合には精密検査を受けます。
- がん検診は、「がんがある」「がんがない」ということが判明するまでのすべての過程を指します。



国が推奨するがん検診は5種類です

種類	検査項目	対象者	受診間隔
胃がん検診	問診に加え、胃部X線検査または胃内視鏡検査のいずれか	50歳以上※1 ※1:当分の間、胃部X線検査に関しては40歳以上に対し実施可	2年に1回※2 ※2:当分の間、胃部X線検査に関しては年1回実施可
子宮頸がん検診	問診、視診、子宮頸部の細胞診および内診	20歳以上	2年に1回
肺がん検診	質問（問診）、胸部X線検査および喀痰細胞診（ただし喀痰細胞診は、原則50歳以上で喫煙指数が600以上の人のみ。過去の喫煙者も含む）	40歳以上	年1回
乳がん検診	問診および乳房X線検査（マンモグラフィ）	40歳以上	2年に1回
大腸がん検診	問診および便潜血検査	40歳以上	年1回

がん検診の利益

■「がん検診」の最大のメリットは、がんによる死亡が減ることです。

- がん検診の最大の利益は、早期発見、早期治療による救命です。症状が出てから受診した場合、がん検診と比べ、がんが進行していることが多くあります。一方、がん検診は症状のない健常者を対象にしていることから、早いうちにがんを発見できます。
- がん検診を受けて「異常なし」と判定された場合に安心を得ることができるのも利益のひとつです。

がん検診の不利益

■ 「がん検診」のデメリットとして、がんが100%見つかるわけではないことや不要な検査や治療を招くことがあります。

- ① がん検診でがんが100%見つかるわけではないこと
- ② 結果的に不必要な検査や治療を招く可能性があること
- ③ 検査に伴う偶発症の問題
- ④ 受診者の心理的影響

2) 5つのがん検診と検診の種類

令和3年度厚生労働科学研究

精神障害のある方に対するがん検診及びがん診療のアクセシビリティを向上するための実装研究

分担研究：かかりつけ精神科の臨床場面における精神障害者に対するがん検診勧奨法の

実施可能性の検討-多施設介入研究

2021年12月25日 ver1.0

国が推奨するがん検診は5種類です

種類	検査項目	対象者	受診間隔
胃がん検診	問診に加え、胃部X線検査または胃内視鏡検査のいずれか	50歳以上※1 ※1:当分の間、胃部X線検査に関しては40歳以上に対し実施可	2年に1回※2 ※2:当分の間、胃部X線検査に関しては年1回実施可
子宮頸がん検診	問診、視診、子宮頸部の細胞診および内診	20歳以上	2年に1回
肺がん検診	質問（問診）、胸部X線検査および喀痰細胞診（ただし喀痰細胞診は、原則50歳以上で喫煙指数が600以上の人のみ。過去の喫煙者も含む）	40歳以上	年1回
乳がん検診	問診および乳房X線検査（マンモグラフィ）	40歳以上	2年に1回
大腸がん検診	問診および便潜血検査	40歳以上	年1回

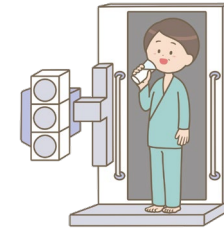
胃がん検診

- 胃がんは、50歳代以降に罹患する人が多く、わが国のがんによる死亡原因の多くを占めるがんです。

- 推奨される検診方法:

「胃部X線検査（胃透視）」

「胃内視鏡検査」



- 推奨される対象年齢：50歳以上
- 推奨される検診間隔：2年に1度
- 胃がん検診の精密検査：胃部X線検査後の精密検査は、胃内視鏡検査を行います。検査で疑わしい部位が見つければ、生検を行い、組織診を行います。



子宮頸がん検診

- 子宮頸がんに罹患する人は、わが国の女性のがんの中でも比較的多く、また30～40歳代の女性で近年増加傾向にあります。ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染が関連しています。

- 推奨される検診方法：

「細胞診（パップテスト）」

子宮頸部（子宮の入り口）を、先にブラシのついた専用の器具で擦って細胞を採って調べる検査です

- 推奨される対象年齢：20歳以上
- 推奨される検診間隔：2年に1度
- 子宮頸がん検診の精密検査：コルポスコープ（腔拡大鏡）下の組織診・細胞診・ヒトパピローマウイルスHPV検査などを組み合わせて行います。

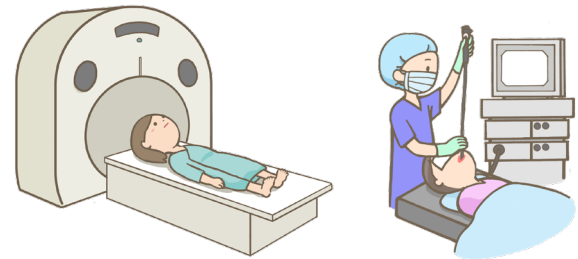


肺がん検診

- 肺がんはわが国のがんによる死亡原因の多くを占めるがんです。
- 推奨される検診方法：
「胸部X線検査」
「喀痰細胞診（50歳以上の喫煙者のみ）」



- 推奨される対象年齢：40歳以上
- 推奨される検診間隔：年に1度
- 肺がん検診の精密検査：一般的には胸部CT検査、もしくはは気管支鏡検査を行います。



乳がん検診

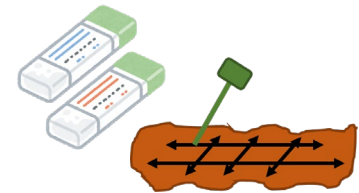
- 乳がんは、わが国の女性のがんの中で罹患する人が多く、死亡原因の上位に位置するがんです。
- 推奨される検診方法：
「乳房X線検査（マンモグラフィ）」
- 推奨される対象年齢：40歳以上
- 推奨される検診間隔：2年に1度
- 乳がん検診の精密検査：マンモグラフィの追加撮影、超音波検査、細胞診、組織診などを組み合わせて行います。



大腸がん検診

- 大腸がんは、罹患する人が増加しており、わが国のがんによる死亡原因の多くを占めています。

- 推奨される検診方法：
「便潜血検査」



- 推奨される対象年齢：40歳以上
- 推奨される検診間隔：年に1度
- 大腸がん検診の精密検査：一般的には大腸内視鏡検査、大腸X線検査（大腸内視鏡検査との併用）または大腸CT検査が行われます。



がん検診の種類（提供者による違い）

■住民（市町村）がん検診

- 市町村が住民に対してがん検診を提供する
- 市町村が指定する医療機関や検診バスなどで受けることができる
- 補助により、少額の自己負担/無料で受けることができる
- 市町村が住民に対して、案内している（リーフレットを配布等）

■職域がん検診

- 職場や保険者が「健康診断」と一緒に、がん検診を提供する
- 補助により、少額の自己負担/無料で受けることができる
- 小規模な会社ではがん検診を提供していない
- 非正社員には実施されないことが多い

■任意がん検診

- 「人間ドック」など、個人が医療機関で任意で受ける検診
- 全額自己負担

がん検診の種類（提供者による違い）

■住民（市町村）がん検診

- 市町村が住民に対してがん検診を提供する
- 市町村が指定する医療機関や検診バスなどで受けることができる
- 補助により、少額の自己負担/無料で受けることができる
- 市町村が住民に対して、案内している（リーフレットを配布等）

■職域がん検診

- 職場や保険者が「健康診断」と一緒に、がん検診を受けることができる
- 補助により、少額の自己負担/無料で受けることができる
- 小規模な会社ではがん検診を提供していない
- 非正社員には実施されないことが多い

次の資料で詳しく説明
します

■任意がん検診

- 「人間ドック」など、個人が医療機関で任意で受ける検診
- 全額自己負担